ラワン語ダル方言における他動詞目的語の標示について
―対格後置詞=*sɔ̀ŋ* が現れる要因―

大西秀幸 *
Email: onishi.hideyuki@gmail.com

0　はじめに

ラワン語の格標示ではある項に対し 2 通りまたはそれ以上の標示が可能な場合がある。他動詞目的語（P 参与者）においても項とそれを示す形式が、「目的語＝対格」 のように一対一に対応せず絶対格か対格が選択される[*1]。本発表の目的は、P 参与者がどの格で示されるのかを決定する要因について記述を行うことである[*2]。この問題は 同方言の文法概説である Bernard（1934）他の先行研究により、有生性の観点からすでにある程度まで整理されているが、その詳細については未だ検討の余地がある。

本発表の構成は次の通りである。第 1 節では必要な背景知識をまとめ、問題設定を行う。第 2 節では P 参与者が対格で示されるときに関与する 4 つの要因を示す。P 参与者の標示には、名詞句の定性（2.1）、タイプ（2.2）、述語動詞のタイプ（2.3）、主題化後置詞の生起（2.4）が要因として関与する。第 3 節では 4 つの要因間の重要度に階層が認められることを示す。第 4 節では本発表のまとめを行う[*3]。

1　背景知識と問題設定

1.1　ラワン語ダル方言について

ラワン語（Rawang）は、ミャンマー連邦共和国・カチン州（Kachin state）の北部でラワン人によって話されている言語で、チベット・ビルマ語派（Tibeto-Burman）のうち中央チベット・ビルマ語群、ヌン語支（Nungish）に属する言語である（Ethnologue 参照[*4]）。ラワン語には 70 ほどの変種が存在することが Morse（1988） で指摘されているが、本発表で記述の対象とするのはダル方言である。発表者によるこれまでの調査でダル方言は次のような文法特徴を持つことがわかっている。

---

* 東京外国語大学大学院

*1 ある名詞項に対し 2 通りまたはそれ以上の標示が可能な言語がある。特に O に対して複数の標示が可能な言語数は多い。Aissen（2003）ではこれを DOM (differential object marking) と呼んでいる。本発表で取り上げるラワン語は典型的な DOM 言語といえる。項標示に関しては、項標示の選択に複数の要因が複合的に関わっている点、要因の優先順序が言語ごとに異なっている点をいくつかの言語を挙げて指摘した研究に江畑（2014）がある。

*2 本発表で用いる主要なデータは ミャンマーのヤンゴン及びカチン州ミッチーナで発表者が現地調査を行い、そこで得られたコーパス資料である。

3 本稿で用いる略号は以下の通りである。[NP...] 名詞句であることを示す／ [CSP...] 格句であることを示す／ [VP...] 動詞句であることを示す／ 非文であることを示す／- 接辞境界／= 接語境界／ + 句内の自立語境界／ 1・2・3 話し手人称・聞き手人称・第三者人称／ A A 参与者 AMB 自他両用動詞語根／ ABL 奪格／ ACC 対格／ ALL 向格／ CL 類別詞／ CNMLZ 節名詞化子／ EMPH 強調／ ERG 能格／ INT 意志／ LOC 場所格／ NEG 否定化子／ NPT 非過去／ N1 非話し手動作主／ P P 参与者 PF 完了／ PFV 完結／ POT 可能／ PURP 目的／ Q 疑問／ RPST 遠過去／ REFL 再帰 TOP 主題化／ VI 自動詞語根／ VT 他動詞語根

*4 http://www.ethnologue.com/language/raw（最終閲覧日 2015 年 5 月 7 日）

基本語順： SV、APV
語類： 名詞類（名詞（普通名詞、指示詞、代名詞）、数詞）、動詞類 (自／他動詞)、副詞類（副詞）、小辞類（助動詞、後置詞、類別詞など）
句構造： （(...) は任意要素、＜... ＞は屈折要素）
名詞／格句構造： [CSP [NP (指示詞 +) 名詞 (+ 数詞)(=類別詞)]=格後置詞]
動詞句構造： [VP(＜否定辞-＞)(使役化-) 動詞 (= 助動詞)(-TAM) ＜-人称／数＞]

1.2 本発表で用いる用語の定義

本発表では以下の定義に従った概念を用いる。澤田編（2010:1）は Blake（1994: 1）に従い、格を以下のように定義している。

澤田編（2010：1)、Blake（1994： 1）による格の定義

主要部に対して従属名詞が取る関係のタイプを標示するもの

澤田編 （2010: 2）は Comrie（1981）に従い、文中の中核的な項を S/A/P の 3 種類に分類し、次のように定義している。

澤田編 （2010: 2)、Comrie（1981）による中核項の定義

S: 自動詞の単一項、即ち（自動詞の）主語
A: 他動詞の動作主項および文法的にそれと同じ振る舞いをする項、即ち（他動詞の）主語
P: 他動詞の被動者および文法的にそれと同じ振る舞いをする項、即ち目的語

1.3 基本的な項標示パターンと動詞の自他

（1）は自動詞文の例、（2）は他動詞文の例である。基本的な自他動詞文では S 参与者と P 参与者は絶対格[*5]で、A 参与者は能格で示される。また、動詞は S 参与者の人称を標示する自動詞形（VI）と、P 参与者の人称を標示する他動詞形（VT）に分かれる。

(1) *əpūŋ* *dì.*
PN（S） 行く.VI
「アプンは行った。」

(2) *rəwāŋ-rì=í* *zī* *kət-ù.*
ラワン人-PL=ERG（A） 大麻（P） 栽培する.VT-3P
「ラワンの人々は大麻を栽培した。」

[*5] ラワン語の名詞は、しばしば格標識なしで発話に導入される。格標識をともなわない形式を本発表では「絶対格で示される」と表現する。具体的には次にあげるような名詞は絶対格で示される。 a. S（自動詞の主語）／一部の P（他動詞の目的語）、b. 時／場所をあらわす名詞、c. 名詞文の述語名詞、d. コピュラ文の主語と補語、e. 呼びかけの対象（呼格とみとめてもよい）

一方で（3）のように P 参与者が後置詞=*sə̀ŋ* で示される例もある。

(3)　*əpūŋ=í*　*ədūr=sə̀ŋ*　*sət-ù.*
PN=ERG（A）　PN=sə̀ŋ（P）　打つ.VT-3P
「アプンはアドゥを打った。」

（3）は=*sə̀ŋ* がなければ不適格な文になる。従って=*sə̀ŋ* は P 参与者を示す機能をもっているといえる。本発表では後置詞=*sə̀ŋ* を対格後置詞（=ACC）と呼ぶ。

以上のように P 参与者は絶対格で示される場合と、対格で示される場合がある。本発表では、「P 参与者が対格で示される要因は何か」という観点で、格後置詞選択の問題を検証する。

2　対格で示される要因

2.1　意味論／語用論的特性に関する要因

P 参与者が対格で示されるために指示物の有生性が大きく関わっていることは Bernard（1934: 15）で指摘されている。有生物の P 参与者が対格で示される例を（4）に、無生物の P 参与者が絶対格で示される例を（5）に示す。

(4)　*ŋà=í*　*nā=sə̀ŋ*　*ké-ŋ-nā.*
1SG=ERG　2SG=ACC　喰う.VT-1SG-INT
「お前を喰ってやるぞ。」（Bernard 1934: 15）

(5)　*əgí=í*　*ɕaʔ*　*ké-ù.*
犬=ERG　餌　喰う.VT-3P
「犬は餌を食べた。」（Bernard 1934: 15）

一方で有生物の P 参与者が対格で示されない例もある。例えば（6）と（7）は P 参与者が有生物なので対格で示されることが予想できるが、実際はいずれも絶対格で示される。

(6)　*səmà*　*lù-ù-lə̀m*　*dì-ə̄m.*
妻　得る.VT-3P-PURP　行く-PFV
「妻を得るために旅に出てしまった。」

(7)　*krə̄ŋtìmòŋ=taʔ*　*sāní*　*jā+pè=í*　*ɕaʔré*　*jə̀ŋ-jə̀ŋ-ù.*
クランティ地域=LOC　昨日　これ＋男=ERG　老人　会う.VT-RPST-3P
「クランティ地域で昨日この男はある老人に会った。」

（6）は P 参与者である *səmà*「妻」を話し手も聞き手も特定していないし、（少なくともこの時点では）特定することが問題とならない文脈である。一方（7）は物語の序盤で、P 参与者である *ɕaʔré*「老人」は話し手にとって特定されてはいるものの、聞き手はまだ特定できていない文脈である。2 つの例に共通するのは P 参与者がいずれも不定[*6]であるということである[*7]。即ち、P 参与者が有生物であっても定でなければ対格で示されない。逆に言うと P 参与者が定であれば有生物でなくとも対格で示される。

[*6] 本発表では「定／不定である」ということを Chafe（1979：39）の次の定義に従って言及している。即ち「ある指示物について、聞き手も既にそれについて知って、同じようにカテゴリー化できる全ての指示物の中から、話し手の意図する指示物を同定できると、話し手が見なすことができるもの（Chafe（1979：39））」を定と、そうでないものを不定と言及している。

[*7] この分布は Aissen（2003）の示す Def ＞ Indef&Spec ＞ Non-spec で説明できる。階層の左端にだけ対格が現れるということである

(8)　*jā+ɕaʔ=sə̀ŋ*　*è-rì-at-ù=lè.*
これ + 餌=ACC　N1-運ぶ.VT-PF-3P=[高圧]
「この餌を全部運んでよ。」

（8）は話し手の眼前の餌を指さして、動作を要求している文である。このように無生物であっても定であるものは対格で示される。従って対格で示されるには Bernard（1934）の指摘する有生性ではなく、定性が要因になっているといえる。

2.2　名詞句のタイプに関する要因

名詞句のタイプが対格標示の要因になると考えられるような例もある。例えば P 参与者が代名詞[*8]であれば対格で示される。（9）では P 参与者である*áŋnìŋ*（3PL） は不定の*ə́mpà*を前方照応しているが対格で示される。

(9)　*wēdū*　*rùŋ-ù=nēr*　*ə́mpà*　*è=ē.*　*nə̀m=í*　*áŋnìŋ=sə̀ŋ*　*lot-ù=è.*
そのように　照らす.VT-3P=TOP　食物　十分にある.VI=NPT　太陽=ERG　3PL=ACC　育てる.VT-3P=NPT
「（太陽が）そのように照らせば食物ができる（つまり）太陽がそれらを育てる。」

P 参与者が代名詞ならば対格で示されるというのは、一見定性と関わっているようにも考えられるが、（10）に示すように不定の疑問代名詞であっても対格で示される。従って代名詞であることと名詞句が定であるということは相互に独立した要因であるといえる。

(10)　*rəwàɨ=sə̀ŋ*　*è-aʔ-ù=lè.*
何=ACC　N1-飲む-3P=Q
「あなたは何を飲む？」

2.3　述語に関する要因

一部の動詞が述語に現れる場合、定性に関わらず、P 参与者は対格で示される。例えば（11）は *sərè*「怖い」、（12）は *lōŋzā*「畏怖の感情をもつ」、（13）は *jàŋ*「気付く」という動詞が述語にくる例だが、いずれも P 参与者は対格で示されている。特筆すべきは A 参与者が絶対格で示されることと動詞が自動詞形であるいう点である。

(11)　*ŋà*　*əgí=sə̀ŋ*　*sərè-ŋ=ē.*
1SG　犬=ACC　怖がる.VI-1SG=NPT
「私は犬嫌いだ。」

(12)　*dərūmè*　*gərāi+gəsə̀ŋ=sə̀ŋ*　*lōŋzā.*
ダルの女性　神 + 恩寵=ACC　畏怖の感情をもつ.VI
「ダルの女性は神の恩寵に対して畏怖の感情を持った。」

(13)　*nə̀mlip+ɕìŋùŋ=taʔ*　*əzə̀ŋ*　*nə̀m*　*daʔ-ù-wē=sə̀ŋ*　*ɕərì=gō*　*jàŋ-bí.*
西 + 山=LOC　最初に　太陽　下す.AMB-3P-CNMLZ=ACC　鹿=CL　気づく.VI-PFV
「西の山に朝日が差し込んだことに鹿は気付いてしまった。」

[*8] 代名詞類は普通名詞類とは異なる複数接辞をとるため名詞類の下で独立した語類をなしていると考えられる。

発表者のコーパスから得られた、必ずこの格標示をとると考えられる動詞は、*sərè*「怖がる」、*lōŋzā*「畏怖の感情を持つ」、*jàŋ*「気づく」、*pū*「気を付ける」、*ətó*「ショックを受ける」の 5 つである。

2.4　主題化後置詞の生起に関する要因

P 参与者に主題化後置詞=*nēr* [*9]が付加されると、対格で示すことができなくなる。例えば（14）では、網掛けの P 参与者 *wēmī*「猫」が主題化されている。

(14)　*mī=í*　*ɕúŋ+húŋ*　*rə́m=taʔ*　*dəʑá*　*daʔ-ù.*　*wēnī=kèní*　*wē+mī=nēr*　*dəŋgú=í=wā*
猫=ERG　木 + 神聖だ　中=LOC　落とす　下す-3P　その日=ABL　それ + 猫=TOP　雄鶏=ERG=EMPH
gō-at-ù.
呼ぶ.VT-PF-3P
「その猫は聖なる木の中に（ごみを）落とした。その日以来その猫は雄鶏が追うようになった。」

（14）は P 参与者が定であるにも関わらず、対格で標示することはできない。また P 参与者が代名詞であっても、主題化の後置詞が付加されると対格で示されない[*10]。

(15)　*àŋ=nēr*　*kàŋɕəŋ=í*　*daʔ-jàŋ-ù*　.
3SG=TOP　先祖=ERG　許す-RPST-3P
「彼は先祖に許された（逐語訳：　彼は先祖が許した）。」

2.3 で挙げた動詞が述語に現れる文では、P 参与者の主題化はできるものの（16）、主題化された時点で P 参与者が対格で示されることは不適格となる（17）。

(16)　12 の再掲（a）

dərūmè　*gərāi+gəsə̀ŋ=nēr*　*lōŋzā.*
ダルの女性　神 + 恩寵=TOP　畏怖の感情をもつ.VI
「神の恩寵に対しては、ダルの女性が畏怖の感情を持った。」（作例）

(17)　12 の再掲（b）

**dərūmè*　*gərāi+gəsə̀ŋ=sə̀ŋ=nēr*　*lōŋzā.*
ダルの女性　神 + 恩寵=ACC=TOP　畏怖の感情をもつ.VI
「（神の恩寵に対しては、ダルの女性が畏怖の感情を持った。）」（作例）

[*9] 主題化後置詞には次に示すような機能が認められる。1. 名詞句或いは格句に後続し、話題の導入、対比、の意味を表す。2. 文標識に後続し、条件文の前件を導く。

[*10] 対格後置詞以外の格後置詞は主題化後置詞との共起が可能である。例えば（a）は能格と主題化が共起している例、（b）は向格と主題化が共起する例である。

(a)　*tá+mūn-ù*　*əsə̀ŋ=í=nēr*　*táɕá-ɕì-jàŋ*　.
慣れる-3P　人=ERG=TOP　理解する-REFL-RPST
「それに慣れた人は、それを理解した。」

(b)　*zūŋ=kaʔ=nēr*　*mə-dì-wē*　.
学校=ALL=TOP　NEG-行く-CNMLZ
「学校には行ってない。」

3 各要因間の階層

ここまで示した言語事実を以下にまとめる。

- 対格標示の要因となるのは Bernard（1934）の指摘する有生性でなく定性（4）
- 定が関わらなくとも代名詞であれば対格で示される（3）
- 述語にいくつかの特定の動詞が現れると対格で示される（2）
- P 参与者が主題化されると、有生／定／代名詞であっても対格で示されない（1）
- P 参与者が主題化されると、特定の動詞が述語に現れても対格で示されない（1）

以上の事実から、複数の要因は等しいレベルで関与するのではなく、重要度に階層が見られることが分かる。即ち、P 参与者が対格で示されるためには、まず主題化されていないことが必要で、その要因をクリアした環境でのみ語類と述語も関与する。さらにそれらの要因をクリアすることで、定性が関与するといえる。( ) 内の数字は要因の関与する順序を示す。

4 本発表のまとめ

ラワン語の対格標示は単一の要因だけで決まるわけではない。主題化、述語のタイプ、名詞句のタイプ、定性が要因として関与しうり、それぞれの要因は互いに独立している。そして要因間には階層があり、主題化→述語タイプ→名詞句タイプ→定性の順に対格標示に関与する。

参考文献

Aissen, Judith (2003) Differential object marking: Iconicity vs economy. *Natural Language and Linguistic Theory.* 21, 435-483. ／ Bernard, T. O. (1934) *A Handbook of the Rawang Dialect of the Nung Language.* Rangoon:Superintendent of Gov' t. Printing and Stationery. ／ Blake, Barry K. (1994) *Case.* Cambridge: Cambridge University Press. ／ Chafe, Wallace(1994) *Discourse, Consciousness, and Time.* University of Chicago Press. ／ Comrie, Bernard (1981) *Language universals and linguistic typology.* London: Basil Blackwell. ／江畑 冬生 (2014)「北東ユーラシア諸言語の名詞項標示」『北方言語研究』第 4 号. 1 ／ Morse, Stephen A. (1988) Five Rawang dialects compared plus more. Prosodic analysis and Asian linguistics: to honour R. K. Sprigg, ed. by David Bradley, Eugnie J.A. Henderson and Martine ／ Mazaudon, 237-250. Canberra: Pacific Linguistics C-104. ／澤田英夫編 (2010) 『チベット=ビルマ系言語の文法現象 1: 格とその周辺』. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.